エコフィロソフィーの模索と展望

The Quest for Ecophilosophy and its Perspective

(『環境思想・教育研究』第4号、2010年)

島崎 隆

SHIMAZAKI, Takashi

一 二つの基本姿勢

哲学を専門としてきた私がエコフィロソフィー（いわゆる環境哲学、環境思想、エコロジー、環境倫理などの分野を総称して、このように呼びたい）に専門分野として関心をもったのは、一九九〇年頃であったと思う。そのときに私は、大学の集团的講義であるワークショップ「環境問題」に他の六人の教員とともに参加した。どういうタイトルで講義をしたのかも覚えていないが、その成果として「われわれにとって《自然》とは何か」という論文を著した。そこで私はまず、『環境白書』（平成元年版）の現状分析の姿勢をいろいろと批判した。とくに第一に、そこでは人間－自然関係の原理的反省の姿勢がなく、『白書』が「人間自らが都市活動の量と質を制御し、汚染物質の発生源での排出規制に努める」¹と述べる時、そこに何か「窮屈だけど仕方がない」、「こうなっては制限もやむをえない」という一種の諦め調が漂っていると指摘した。そこで私は次のように問題提起した。

「何か根本的なところで勘違いがありはしないか。われわれはもちろん、自然を資源として生活せざるをえないが、自然に対する見方という点で、根本的な誤りを知らず知らずに犯していないか。一個独自の自然存在であるわれわれ人間が大自然へ向かってみずからを豊かに解放できず、ただ自分の行動にやむをえず制限を加えるという発想は、根本的に誤っているのではないか。ここに考え至ると、われわれはすでに本格的な意味での『哲学』の前に立っているのである。」²

これだけでは何か居丈高に聞こえるが、私はいまでもこの自然観（さらに生命観、身体観、健康観、食物観なども含む）の変革的姿勢にこだわっており、それはライフスタイルの問題にもつながるものとして、私の研究のなかで基調低音のように流れている。私が「断食の思想と科学」³という論文を書いたのも、まったく同様の趣旨からである。まさにそこでは、いま述べた生命観、身体観、健康観、食物観の変革が関わっており、それは同時に、環境問題にも直結する、近代主義的で消費型のグルメ志向や高カロリー、高タンパク質の栄養観への批判でもある。

第二に、環境問題を個人の責任などに解消せずに、企業側の責任を含め、環境問題発生の社会的メカニズムを批判的に把握すべきであるという視点の重要性である。『白書』は「一方、消費ニーズの多様化を反映して、使い捨てびんやペットボトルの販売、消費量が増加しており」、フロン入りスプレーなどの使用によって、「市民一人ひとりの行動が地球規模の環境問題にまでつながっていることが明らかになった」と指摘する⁴。こうして、『白書』は企業とともに個人の責任を追及するが、私見では、「ここで必要なのは、環境問題を社会の体系的・批判的な認識と正当に結合する視点である。〔中略〕公害などの環境問題の社会的発生のメカニズムを科学的に解明すべきである。『白書』には、こうした社会科学的分析もまた欠けている」⁵。

大量生産の帰結としての高度消費社会の維持のため、つまり利潤第一主義のために、企業側はマスメディアを通じて大量宣伝し、われわれ消費者の購買欲をかきたてる。わずかなモデルチェンジを施した商品が次々と売り出され、「こんなものいらない」といわれる商品が出回る。古い製品を大事に修理して使おうとすると、「もう部品はない」「新しいのを買ったほうがお得ですよ」などといわれてしまう。この意味で、「消費欲求は人間の実際の基本的ニーズから起こったというよりは、意図的・作爲的・操作的につくりだされたものである」⁶とも指摘されるのである。

『白書』を出版している政府を初め、金力と宣伝力をもった勢力が環境問題のありようを左右していることを忘れるべきではないだろう。この点では、『不都合な真実』という、一見奇妙な映画のタイトルの由来に注目することは、意味なしとはしない。同名の著作を著した、元副大統領アル・ゴアにとって、この「不都合な真実」とは、だれにとつての「不都合」なのか⁷。このさいに、対立候補であった元大統領ブッシュ＝元副大統領チェイニーが石油産業と結合していた事実が浮かび上がり、彼らにとつての「不都合な真実」が地球温暖化問題なのである。周知のように、かつてブッシュ前大統領は京都議定書から一方的に離脱をしてしまった。もとより、ゴアが真実を語る正義の味方かどうかとも、あらためて吟

味されなければならない。いずれにせよ、地球温暖化懐疑論が発生してきたアメリカでは、この懐疑論は、「温暖化はウソ」「温暖化対策は経済を崩壊させる」など、アメリカのシンクタンクが振りまいていると指摘される⁸。

以上によって、豊かな自然観の獲得、社会批判の視点の確保という上記二つの観点は、私にとって、いまでも貫きたいと思っているものである。

二 弁証法的自然観への注目

次に私は「〈人間－自然関係〉を根源的に問う」という論文を書いた⁹。これは一九九二年のことで、大学の「一般教育総合科目」という新しい講義で、文学、体育、自然科学の三人の先生方とともに講義を何度かおこなったのである。

ここで私は、自然観の歴史的変遷、西洋的自然観と日本の自然観の比較、人間－自然関係の四つの局面、エンゲルスの自然弁証法など、のちほど自分の自然観の基本となる論点を詳細に展開した¹⁰。エンゲルスの自然観とは、きわめて単純にいうと、歴史的には進化論的発想をとり、構造的には単純なものから複雑なものまで、自然は無限に豊かな相互作用をして存在しているという発想である。いずれにせよ、エンゲルスに倣い、豊かな自然観を弁証法的に形成しようというのは、私の基本姿勢であった。

この点でいえば、私自身はマルクス主義の創始者のエンゲルスについては、両面的スタンスをとり続けてきた。一方では、西欧マルクス主義が批判するように、彼の『反デュリング論』『フォイエルバッハ論』などは、いわゆるマルクス・レーニン主義の哲学的基盤のひとつになってしまった。そこに、エンゲルスはマルクスと同じ見解をとり続けたのかどうかという、マルクス・エンゲルス問題が発生してきた。だが、他方では、当時の自然科学の多様な成果を天才的に総括した彼の自然弁証法は、エコロジー的側面を保持するものとして、環境問題にも豊かな知見を提供できるという現代的価値をもっている。エンゲルス評価は、この意味で、いまやあらたに再確立されなければならない。こうした、ややアクロバティックなエンゲルス読解は、マルクス主義のなかでも十分に浸透はしていないといえよう。もちろん弁証法的自然観の高い評価は過去のマルクス主義においてもなされていたわけだが、それは環境問題などの実践的課題と結合されていたわけではなかった。したがっていま、エンゲルスの自然弁証法は、あらたに環境問題の基礎となる自然観として再読解されなければならない¹¹。だがそのさいに、「いまこそエンゲルスの復権を！」などと時流に乗るのではなくて、ソ連・東欧の社会主義崩壊を念頭に置きつつ、エンゲルス哲学への批判がきちんとおこなわれることが条件である。社会エコロジーを説くマレー・ブクチンらが「弁証法的自然主義」を提唱

するならば、まさにこのエンゲルス流の弁証法的自然観こそ、そこで論じられなければならないだろう。

前掲「〈人間－自然関係〉を根源的に問う」では、最後に、エコロジー的経済学についてもある程度言及したが、残念ながら、この論点を私はのちにはそれほど展開はできていない。そこではカール・ポランニー、玉野井芳郎らの「狭義の経済学」と「広義の経済学」の区別が議論され、前者の特徴を、①市場経済を基盤とする、②生産力主義に立つ、③「一点経済」を想定する、④自然を労働の、さらに価値創出の単なる素材とみなす、と指摘した¹²。③は同僚の経済地理学者の水岡氏の見解を採用したもので、それは、経済学的考察から空間、時間、自然環境、生物としての人間などをすべて捨象し、経済活動だけの一点に注目する立場のことである¹³。そして興味深いことに、水岡氏はエンゲルスの自然弁証法を環境問題との関連で詳細に論じている。

さらに拙論では、エコロジー的経済学、農業経済学の立場から、従来型の「生産－消費の基本枠組み」と対比して、「エントロピーの減少の増幅系」の図式を引用して説明した¹⁴。残念ながら私は、それ以後こうした経済学的観点を詳細には取り上げることができてはいない。

三 エコマルクス主義に向かって

私はのちに、豊かな自然観と経済批判・社会批判の両方の観点を確実にもつエコフィロソフィーはマルクス主義であると考えて、エコロジー的マルクス主義（エコマルクス主義）の研究を開始した。周知のように、後者には『資本論』などを中心とするマルクス経済学の蓄積が存在する。この点では、この立場は、すでに一九七〇年代には、欧米、日本で部分的に登場してきており、とくに最近では、アメリカのジョン・ベラミー・フォスターの『マルクスのエコロジー』が翻訳されたことが注目に値するだろう¹⁵。もちろんそこでは、さきほどのエンゲルスの自然観に注目されるとともに、「人間と自然の間の物質代謝」の構想など、マルクスそれ自身が唯物論者であるがゆえに、実はエコロジー的観点を豊富にもっていたということが詳論されている。

そのさい私は、アメリカのエコマルクス主義の配置に注目し、そこに『組織と環境 Organization & Environment』（季刊）という雑誌を中心にした、フォスター、ポール・バーケットのグループと、ジェームズ・オコンナー、ジョエル・コヴェルらを中心とし、『資本主義 自然 社会主義 Capitalism Nature Socialism』（季刊）を出版しているグループがあることを知り¹⁶、両者がかならずとも見解を一致させていないことに気づいた。しかしいずれにせよ、エコマルクス主義、エコ社会主義の展開は、日本を除けば、アメリカが中心であるように思われた¹⁷。

実はそのなかで、エコマルクス主義の提唱者の一人である

ポール・パーケットが『エコロジー的経済学』という新著作で、マルクス主義の経済学とエコロジー的経済学（重農学派のケネー、チュルゴー、さらにポドリンスキー、ハーマン・デイリー、ニコラス・ジョージエスク＝レーゲン、エコ・スラッファー学派ら）との対話を試みている。すでに私は、彼の同僚のジョン・フォスターらとともに、このパーケットには注目してきた¹⁸。彼らエコマルクス主義者とエコフェミニズム、社会エコロジーとの激しい論争は、拙著『エコマルクス主義』の第二部「自然は人間の非有機的身体である」で注目して、検討したものであった。そのなかでフォスターとパーケットは連合して、エコマルクス主義を擁護したわけである。ここで詳細にその著作を紹介できないが、パーケットは同書『エコロジー的経済学』の四つの基本的論点として、①自然と経済的価値の関係、②資本としての自然の取り扱い、③経済システムにたいするエントロピーの法則の重要性、④持続的発展の観念、を列挙した¹⁹。すでにさきほどのワークショップ「環境問題」で室田武がエントロピーについて言及していたが、熱力学第二法則（エントロピー増大の法則）という、私にはとてもわかりにくい知識にまた出会ってしまった。この問題も私にとって気になるテーマのひとつである。

なお、社会主義中国においても、当然かもしれないが、エコマルクス主義、エコ社会主義（中国では「生態社会主義」などといわれる）の研究は盛んであり、私は二〇〇四年に雲南省・昆明における「環境問題と環境哲学」の国際シンポジウムに、他の日本人研究者とともに参加したこともあった。環境先進国ドイツでは、左翼エコフィロソフィーの研究はそれほど盛んではなかったように思われるが、現在はどうであろうか²⁰。

四 より広く環境問題への哲学的取り組みを

もちろん私はエコマルクス主義だけに関心をもっていただけではなく、エコロジー全般に関心の枠を広げようと努めてきた。そのなかで、主流の市場主義のエコロジー、ディーブ・エコロジー、社会エコロジー、エコフェミニズム、環境プラグマティズム、直接行動主義などの各種エコロジーを理解しようと試みてきた。エコマルクス主義もそのなかのひとつにすぎない。各エコロジーには一長一短があるが、私はエコマルクス主義を中心に、これらエコロジーの特質にもさらに学んでいきたいと考える²¹。

とくにそのなかで、私に関心をもってきたのは、エコマルクス主義とエコフェミニズムとの対話と相互批判である。これはアメリカで活発に展開されてきた。拙著『エコマルクス主義』の第二部で取り上げた論争もそこに部分的に関わるが、さきほど引用した、エコマルクス主義の環境雑誌『資本主義自然 社会主義』は意図的に、この論争を継続させようとしている。たとえば、二〇〇五年にトロントのヨーク大学でお

こなわれたエコマルクス主義とエコフェミニズムとの対話に関するシンポジウムが象徴例である²²。

そしてそのさい、私は日本のエコフェミニズムの論争にも眼を向けることとなり、さらに、当時唯一のエコフェミニストとされた青木やよひと上野千鶴子ら日本女性学研究会との論争にも関心をもった²³。エコフェミニズムにもいろいろな潮流があるが、そのラディカリズムはエコマルクス主義をも批判的に超えて、全世界的な視野で女性差別と自然破壊の関係、さらにサブシステム経済の問題、地域的生活文化の問題、破壊の根源にある資本の活動と白人中心主義・男性中心主義（家父長制）を厳しく批判する²⁴。あわせてその立場は、先進国による途上国の人間と自然の同時搾取の現象にも目を向ける。環境問題と社会批判・自然認識との関連で、こうした問題領域も自分の研究課題である²⁵。

ところで、環境問題がいまここで現実起こっている課題である以上、哲学といえどもその状況をリアルに把握することが必要である。哲学は現実問題を離れて、空理空論に陥ることを避けなければならない。この点で、たまたま私は大学院の講義・先端課題研究（二〇〇五年から三年間継続）で、自然科学、社会科学の研究者の方々とともに環境問題について考える有益な機会を得た。さらにそのなかで、大学に招待された環境活動家レスター・ブラウンの考えを紹介・検討することとなったが、ブラウンの幅広い視野は、私をおおいに裨益してくれることとなった²⁶。映画「ダーウィンの悪夢」（フーベルト・ザウパー監督）を取り上げて議論したのも、この講義のなかでであった²⁷。

とはいえ、やはり哲学の課題は総合的世界観の把握や倫理・価値の考察である。現実問題だけを追いかけていては、そこに哲学の独自性は存在しない。その点で、哲学的に環境問題の全体を見渡すと、そこにいくつかの基本課題があることがわかる。そうした課題の全体を反省的に視野に収め、偏見のない見方で問題にアプローチすることが大事であろう。この点で私は、以下の四つの基本課題を考えてきた²⁸。

(1) 自然哲学や、生物学の一分野である狭義のエコロジー（生態学）、さらに地球物理学、気象学、海洋学、森林学などの環境科学を含む自然科学の分野。要するに自然そのもののあり方を探究する分野。

(2) 人間中心主義と自然中心主義の対立、自然の価値、動物の解放・権利、環境的正義の問題など、環境倫理や生命倫理や価値、規範の分野。

(3) 社会認識、社会批判と環境問題との関連の分野。つまり環境問題の社会的発生源を論ずる分野。ここから環境経済学、環境政治学、環境教育学などの多様な社会科学が登場する。

(4) 地域の文化を担うエコロジカルなライフスタイルの形成の分野。そこでは人びとはすべて、日常生活を営む住民と

なる。衣食住の基本生活を中心に、ゴミの廃棄など、生活人としての人間のありようが問われる。

ここには、従来の哲学的部門との結合が見られる。(1)の基礎には自然哲学があり、(2)の基礎には倫理学、価値論などがある。(3)には広く、社会哲学、政治哲学などが関わる。

(4)にはやはり倫理学、道徳などが関わるが、とくに個人的主体性の議論が要求されるだろう。この点、かつて「生活の哲学」などがテーマとされたこともあった。そしていずれの分野にも古代からの哲学的展開が存在するのであって、それを考慮に入れることで、より重厚な認識が達成されることだろう。詳細は関連箇所を見ていただきたいが、この四つの分野で環境問題の基本理解が尽くされているのではないかなと思われる。

五 共生社会における哲学の役割

現在、環境倫理学などについて無効論が提起されている。自然中心主義か人間中心主義かというような抽象的議論は、焦眉の環境問題にたいして役に立たないというのである²⁹。たしかに瑣末な議論を延々と続けることは無意味であろう。ちょうどこの問題は、過去にあった「哲学はどういう役に立つのか」という問題の環境問題版である。このさいに、哲学は「無用の用だ」などと消極的に返答するだけでは不適切ではないか。これこれの哲学的・思想的な見方があるからこそ、ただひたすら事実だけを見つめては出てこないような、幅広くて深い問題が発掘されるのだという姿勢を、哲学研究者はいつも課題として担う必要があるだろう。そうでなければ、ひたすら難解なだけの哲学は「無用の長物」と化するであろう。

いずれにせよ、動物である人間は自然と共生しなければ生きていけない。自然との共生か、さもなければ人間の死である。そしてまたエコマルクス主義は、労働者の搾取と自然環境の搾取を同根の現象として把握する。人間社会での人びとの共生なしには、自然との共生も可能ではないだろう。自然自身はある意味永続的であり、社会を破壊し、環境を破壊した人類は、その結果自然界から消え去るのみであろう³⁰。環境破壊の事実を謙虚に学べば学ぶほど、人類破滅のシナリオがリアリティをもつ時代となった。

こういう現実認識のなかにあつて哲学は何をすべきか。こうして、やはり哲学は、現実の問題に深く学ばねばならないとともに、現実問題に還元できない、原理的認識のありようを追求する点にその独自の役割があるといえるのではないかな。一九九〇年からの歩みは遅々たるもので、私の扱った範囲もわずかだったと実感している。だが、哲学の独自のメリットを自然環境問題などに生かしていく試みを、私はもう少し続けたいと考える。

【注】

- 1 環境庁編『環境白書』（平成元年版）、一一〇頁。
- 2 拙論「われわれにとって《自然》とは何か」、『一橋論叢』第六〇〇号、一九九〇年、五〇三頁。
- 3 拙著『現代を読むための哲学 宗教・文化・環境・生命・教育』創風社、二〇〇四年の第五章「断食の思想と科学 新しい生命観を目ざして」を参照。
- 4 前掲『環境白書』、一一八頁。
- 5 前掲拙論「われわれにとって《自然》とは何か」、五〇三頁
- 6 武田一博「ライフスタイル論」、尾関周二・亀山純生・武田一博編著『環境思想キーワード』青木書店、二〇〇五年、一七二頁。
- 7 アル・ゴア『不都合な真実』枝廣淳子訳、ランダムハウス講談社、二〇〇七年、二八四頁以下の「地球温暖化を政治問題化する」を参照。さらにもうひとつの問題は、ゴアはそれほど強調してはいないが、一般の人びとが自分たちの暮らし方をなかなか変えられないということである。
- 8 明日香壽川『地球温暖化 ほぼすべての質問に答えます！』岩波ブックレット、二〇〇九年、八〇頁参照。同書は、だれと明示こそしていないが、環境問題懐疑論者の提起した論点を詳細に反論したものと、注目される。
- 9 拙論「(人間-自然関係)を根源的に問う」、一橋大学小平分校編『一橋大学一般教育総合科目・人間と自然』（非売品）一九九二年。
- 10 この成果を、拙著『ポスト・マルクス主義の思想と方法』こうち書房、一九九七年の第二章「われわれにとって《自然》とは何か？ エンゲルス『自然弁証法』によせて」。拙著『現代を読むための哲学』（前掲）の第四章「自然哲学は環境問題とどう関わるのか？」などに収録されている。
- 11 この点は、拙著『エコマルクス主義』知泉書館、二〇〇七年の補論2「『自然弁証法』の《環境論的転回》」などで遂行された。
- 12 前掲「(人間-自然関係)を根源的に問う」、一一〇頁。
- 13 水岡不二雄「自然環境の社会への包摂」、前掲『一橋論叢』第六〇〇号、四六二頁以下参照。
- 14 中岡哲郎編『自然と人間のための経済学』朝日出版社、一九七七年、所収の渡川則雄「フロー型経済からストック型経済への転換」、六九頁、八五頁を参照。
- 15 渡辺景子訳『マルクスのエコロジー』こぶし書房、二〇〇四年。
- 16 『資本主義 自然 社会主義』の編集長であるコヴェルの著作が最近翻訳された。戸田清訳『エコ社会主義とは何か』緑風出版、二〇〇九年。原題は *The Enemy of Nature* である。
- 17 以上のアメリカの現状の紹介・検討、およびそのさいのマルクス主義の変貌の問題として、拙論「『エコマルクス主義』の現在と自然環境問題」、刊行会編『季報・唯物論研究』第一〇五号、大阪、二〇〇八年を参照。
- 18 すでに Paul Burkett, *'Marx and Nature: A Red and Green Perspective'*, New York, 1999: St. Martin Press. を、私は拙著『エコマルクス主義』で利用していた。
- 19 Paul Burkett, *'Ecological Economics: Toward a Red and Green Political Economy'*, Chicago, 2009: Haymarket Books, p.vii. だが、すべての自称「エコロジー的経済学」がエントロピーの法則などをつねに論じているわけではないようだ。倉阪秀史『エコロジカルな経済学』ちくま新書、二〇〇三年では、エントロピーの法則などは登場せず、同書は、あたかも環境問題に対応した、修正近代経済学という印象である。
- 20 たとえば、クラウス・マイヤー＝アーベッツ『自然との和解への道』（山内廣隆訳）上下、みすず書房、二〇〇五、六年、における「実践的自然哲学」の構想は、ドイツ社会民主党の環境政策の根本をなすとされるが、それほど、ラディカルとは思われない。
- 21 これらエコロジーの紹介・検討については、拙論「『エコフィロソフィー』の基本課題をめぐって」、『一橋社会科学』第四号、二〇〇八年、二二頁以下を参照。
- 22 *'Capitalism Nature Socialism'*, Vol. 17, Nr. 4, December 2006. 所収のシンポジウム「エコフェミニズムとの対話」を参照。このシンポジウムの責任者はエコフェミニストのアリエル・サレーである。

-
- ²³ この論争の紹介として、日本女性学研究会・85,5 シンポジウム企画集団編『フェミニズムはどこへゆく』ウィメンズブックストア、一九八五年。さらに江原由美子編『フェミニズム論争』勁草書房、一九九二年参照。
- ²⁴ 日本では郭洋春・戸崎純・横山正樹編『環境平和学』法律文化社、二〇〇五年などが、こうした幅広い課題に取り組んでいる。
- ²⁵ 拙論「エコロジー 論争から共同的対話へ」、嶋崎隆編『環境の未来を創造する』旬報社、二〇一〇年所収、が初発的なものである。
- ²⁶ 先端課題研究の共同的成果は、前掲『環境の未来を創造する』となって現れた。
- ²⁷ 拙論「経済のグローバル化と映画『ダーウィンの悪夢』の波紋」、東京唯物論研究会編『唯物論』、第八一号を参照。
- ²⁸ 初発的には、拙論「エコロジー 地球生命圏という自然環境」、渡辺雅男・渡辺治編『「現代」という環境』旬報社、二〇〇七年、三三頁以下で提起された。より詳細には、前掲拙論「『エコフィロソフィー』の基本課題をめぐって」を参照。
- ²⁹ 岡本裕一朗『意義あり、生命・環境倫理学』ナカニシヤ出版、二〇〇七年、ii 頁、二七九頁などを参照。しかしたとえば、環境格差、環境的正義などの問題は環境倫理学の領分とみなされるが、これは世界の環境問題の現実をリアルに抉りだす視点を提供できるであろう。環境思想・教育研究会編『環境思想・教育研究』創刊号、二〇〇七年の特集「環境正義と社会理論」を参照のこと。
- ³⁰ この点では、「共生型共同社会」の構想を提起する、尾関周二「差別・抑圧のない共同性へ向けて」、藤谷秀・尾関周二・大屋定晴編『共生と共同、連帯の未来』青木書店、二〇〇九年を参照。そこではいわゆるコモンズ論と市民社会論があらたに相互補完的にとらえられている。